地域資源を活用した環境教育実践とその評価
ー 小学校高学年ー

10108012 石塚 雅俊
10108046 金子 成美

1. はじめに

1.1 環境教育とは

学校における環境教育は、各教科や総合的な学習の時間等で扱われている。その他にも、職場や地域社会など、環境教育は様々な場、内容で実施されているが、共通の基礎的要素として、文部科学省では以下のことを重視している。

a. 人間と環境との関わりに関するものと、環境に関連する人間と人間との関わりに関するもの、その両方を学ぶこと
b. 環境に関わる問題を客観的かつ公平な態度でとらえること
c. 豊かな環境とその恵みを大切に思う心をはぐくむこと
d. いのちの大切さを学ぶこと

1.2 環境教育に関する歴史

環境教育に関する歴史を年代別にまとめると次のとおりである。

・1960 年代:日本で環境問題・公害問題の発生。環境学、環境問題に対する市民の知識・関心の低さが指摘される
・1970 年代、環境教育・公害教育の開始。国連人間環境会議、国際環境教育会議、国連環境計画(ＵＮＥＰ)の発足
・1980 年代、世界規模の環境問題の顕現化、環境教育への関心を世界的な規模に高める。人間環境宣言、「持続可能な開発」という考え方が登場
・1990 年代、環境基本法の制定、環境教育学会などの発足。リオデジャネイロ宣言、環境基本法などの制定
・2000 年代、環境基本法では「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うことなどの目的を鮮明化

学校教育法では「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」などの目的を明化

・2010 年代、総合的な学習の時間など、学校の教育活動を通じて環境教育を開始する

1.3 環境教育において目指す人間像

「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」では、環境教育を通じて、「人間と環境との関わりについての正しい認識に立ち、自らの責任ある行動をもって、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材」の育成を目指すよう記されている。

1.4 小学校教育おける環境教育のねらい

a. 環境に対する豊かな感受性の育成
b. 環境に関する見方や考え方の育成
c. 環境に働きかける実践力の育成

以上の 3 点である（環境教育指導資料[小学校編]）。小学校高学年では、a,b を踏まえた上で、c の実践力の育成を主なねらいとする。

1.5 環境教育における指導方針

小学生の段階では、あらゆる事物・現象に対して豊かに感受する時期であるため、活動や体験を通じ、以下のことを重要視している（環境教育指導資料[小学校編]）。

a. よりよい環境づくりのために配慮した行動をとることができる態度を身に付けさせる
b. 環境問題を総合的に把握できるようにする

2. 研究の目的

近年、環境問題への意識の高まりから、身近な自然環境などの地域資源を活用した環境保全活動が行われる機会が増えている。中でも環境教育は、それらの基礎となる重要な役割を持つ。(2007，韓国環境部国際環境教育研究所)

そこで本研究では、近隣の小学生を対象に、大学内に存在する地域資源を活用した稲作体験や谷戸探検といった環境教育活動の実践と、その教育プログラムの評価を目的とした。